

江戸の仏像文化解説

徳川みらい学会が講演会

静岡

家康公
顕彰400年

徳川時代の歴史的意義を研究、発信する「徳川みらい学会」(会長・芳賀徹)県立美術館の第2回講演会が10日、静岡市葵区の市民文化会館で開かれた。東京芸大大学院の藪内佐斗司教授が当時の仏像文化を解説し、「作品修理が盛んに繰り返され、いかに市民が(仏像を)好きだっ

たかが分かる」と説明した。

国内の仏像史は一般的に、「応仁の乱以降は見るべきものは少ない」との見方があるという。藪内氏は通説を認めつつ、天平時代(8世紀ごろ)に建立された仏像が「安定社会にあった徳川時代に、実は数多く修復された」と功績を強調した。

一例として挙げた奈良・東大寺の大仏は、

地震などによる度重なる消失被害を経て現在の頭部が徳川期の1691年に完成したという。

藪内氏は奈良県のマ

スコットキャラクター「せんとくん」の考案者。会場には450人の歴史ファンが詰め掛け、ユーモアを交えた話を楽しんだ。

学会は講演会に先立ち総会を開き、役員を選任案や本年度の事業計画案などを承認した。



講演する藪内佐斗司教授
＝10日午後、静岡市内